

人間学を学ぶ月刊誌

[chichi]

昭和51年8月16日 第三種郵便物認可
令和2年8月1日発行 毎月1回1日発行 通巻第542号

2020 September

9

致知

〔特集〕

人間を磨く

狂言師／人間国宝

野村 萬

日本BE研究所所長

行徳哲男 &

思風庵哲学研究所所長

芳村思風 &

関ジャニ8

村上信五

「令和」の書に込めた思い

茂住菁郎

書いている最中の記憶はさほどありません。昨年四月一日、新元号発表会見で菅義偉官房長官が掲げた「令和」の二文字——あの日、自分の筆で揮毫した書が一齐に注目を浴びたのを、私は未だに他人事のように感じています。

昭和五十五年に大学を卒業して内閣府へ入職、定員二名の辞令専門官となって今年で四十年。幾度ももの組閣改造に伴う膨大な官記辞令の発行をはじめ、高橋尚子さんから国民栄誉賞受賞者の表彰状、復興庁など新設官庁の看板等々、指示に従い閣内の多岐にわたる文書を揮毫してきました。こうした公務の傍らプロの書家としても研鑽を積んできましたが、あの日の仕事を終えて感じるのは、聞いた限り

大半の方が「令和」という元号を好意的に受け止めてくださったことへの安堵です。

入職当時の上司だった河東純一さんが後に「平成」の元号を揮毫した方だったこともあり、部下と共に準備はしていましたが、私に依頼が来てからも新元号は当日まで知らされないため、あらゆる場合を想定し、発表に適した半紙や墨を念入りに検討しました。

とはいえ、これまで作成してきた文書は総理から〇〇庁長官へ、など「誰から誰へ」という対象者が明確なものがほとんどでした。それがいざ国民全体に向けたものを書くとなると、新元号がきちんとして受け入れてもらえるか否かは自分に懸かっている。そういう重圧がやはりありました。

事実、発表の数日前に突然「書けないかもしれない」という不安が込み上げました。しかし、私がすべきは上の方の思いを汲み、それをどなたが見てもよいと感じていただけるような字で表現することです。その思いの下、あの書は

私個人の表現ではなく、そこに込められていた思いを偏りのない心、中庸の精神で表したつもりです。

当日、人目に触れないよう官邸に入った後、係の方から「令和」と印字された紙を渡されました。初めて知らされた元号を見た時、パソコンやスマートフォンが普及した現代に生きる国民が受け入れやすい、活字に近い形で表すことを期待されているのではな

いかと察したのでした。ただ、会見をご覧になった方はお分かりかと思いますが、実際は活字通りには書いていません。私の使命は模写ではなく、あくまで国民に受け入



れられるよう筆で書き改めることです。上の方と会話はでないものの、私が感じた思いをどう表すべきか、その微妙な表現の仕方を擦り合わせる必要があると感じました。

私は即座に手元の紙に見本を書き、係の方に手渡ししました。直後、その方を介し「お任せします」というお返事があり、机に向かったのです。

なぜこのような難しい仕事に務まったか考えた時、若い頃に薫陶を受けた書の大家・青山杉雨先生のことか思い起こされます。岐阜に生まれた私は短大を卒業後、社会に出る前にまだ時間が欲しいと考へ、東京の大東文化大学経済

学部に入學。他大学で書道部長を務めていた兄から大東文化が押しも押されぬ書の名門だと知らされたことが、書道部への入部に繋がりました。

部員数は優に三百を超え、全国から選りすぐりの学生が集まる書道部で、素人の私は初め小馬鹿にされながら、けれども「負けてたまるか」の一心で、講義にはまともに出ず、書に没頭していきました。そんな生活を続けた一年生の終わり、当時文学部で教鞭を執っていた青山先生の門下に入る機会を得たのです。

いま振り返っても怖い先生でした。大勢の学生が集まる一門において、自分の作品を

見てもらえる時間はごく僅かです。手本を書いて教えることとはしない方でしたから、私は「うん。これで進めなさい」などという寸評を頼りに仕上げる他ないわけですが、それを真に受けて次も同じように書いて出すと怒られる。先生は「その調子で成長しろ」という意図でおっしゃっていたのであり、常にそれを汲み取って創意工夫を重ねることが、先生の下で学ぶ条件でした。

忘れられない思い出があります。横書きの文字に挑戦した際のこと、先生に二度見てもらってもいまいち要領が掴めず、三度目の提出をした時、雷を落とされました。消沈し

別室でうなだれていると、先生の大声が聞こえてきました。「茂住いっ！何してる！」

その時、私は堪らなく嬉しくなりました。先生が初めて名前を読んでもくださり、私を見てくださっていると知ったからです。「お前はな、他のやつがどう書いているか見ているいから分らないんだよ！」と先生はおっしゃいました。

それから私は他の学生の書を真剣に観察、文字配置にヒントを得て書を完成させ、三年生の時には三百七十余名をまとめる書道部長となり、仲間と切磋琢磨していきました。そうした姿勢が認められたのか、先生の推薦でこの仕事に

就くことができたのです。脇目も振らず没頭していると、誰かがそれを見て応援してくれるものだと感じました。

四年前に定年を迎え、いまは再任用という形で専ら後任を指導しています。私たちは裏方ですが、こうした経験から伝えたいのは自ら学び続ける姿勢であり、よりよい書を求める意識をなくしては絶対にとめて、あの「令和」の書は既に過去の出来事であり、大事なものはいまをどう生きるかだと思っています。今後も学び続け、どこまでも書道を追究していく所存です。
(もずみ・せいそん書家)